

明治七年四月十八日 開拓次官黒田清隆

開拓使

頃日横濱ガゼット新聞誌ニ北海道開拓ノ事ヲ
論シ數十條ノ問難ヲ載スルヲ見ル是レ無稽者
ノ妄論事其實ヲ失フ者亦少サカラス固ヨリ
齒牙ニカクルニ足ラス然レモ世ノ不鮮者或ハ之
カタメ誤ツテ疑惑ノ心ヲ生センヲ恐ル固テ
今開拓事務施行ノ大畧ヲ左ニ條述スルソ
事大小トナク先ツ其目的ヲ立テ其經費ヲ
概算シ然ル後事ノ舉ルニ從ヒカノ及ブ野
ヲ量リ順次之ヲ施サシム決シテ成ス可キ

サルナリ黒田次官ノ開拓ニ奉任スル初ヨリ
速切ヲ求メス專ラ完全ノ切ヲ期セリ故ニ
先ツ建議シテ以テウク十年ニシテ基礎立チニ
十年漸ク其効ヲ見三十年ノ後其業大成スベシ
ト蓋シ其規模弘闊事業遠大固ヨリ一朝一夕ニ
シテ成スヘキニ非ス世ノ議者其レ之ヲ再思セ
ヨ礼幌ノ地タル西ハ小樽港ニ接シ北ハ石狩
田ノ諸山ヲ環シ河流其間ヲ貫キ平原沃野數十
里ニ亘リ以テ夥多ノ人口ヲ容ルヘシ其全道ノ
中央ニ在リテ四方ヲ控制スルニ足ルヲ以テ本

廳ヲ此地ニ置ケリ
行旅ノ往來貨物ノ運輸ヲ便ニセシ為メ函館札
幌ノ間陵ヲ夷ケ壑ヲ填メ四十六里程ノ新道ヲ
築キ各處ニ驛亭ヲ設ケ膽振國繪鞆ニ新港ヲ開
キニニ從來無人ノ地ナリシモ居民既ニ百餘戸
及ヘリ

明治二年以來人民ヲ招募シテ北海道各處ニ移
住セシム其法タル家屋農器等ヲ給シ三年ノ間
衣食ノ資ヲ與フ而シテ墾田一及毎ニ賞金二圓
自費移住ノ者八十圓ヲ以テシ其地租ハ七年間

開採 位置

之ヲ免ス工商ノ如キ其産業ノ資ヲ給スル亦務

農ニ準ス

第五

土地賣貸ノ法ヲ設ケ山林原野其品位ヲ三等ニ

分チ低價上地千坪一圓五十錢
中一圓下五十錢トスニテ之ヲ賣與シ十年間地

租ヲ免ス

第六

全道産鑛ノ地固ヨリ少シトセス本使鑛山開採

ノ規則アリテ人民ノ求ムル所ニ從テ之ヲ允許

ス抑物産ヲ興隆シテ開拓ノ資本トナスハ一大

緊要ノ事ニシテ其品位ヲ査定シ其經費ヲ概算

シ然ル後開採ニ從事シ輕率耗財ノ失ナラン

第七

ヲ要ス故ニ專ラ意ヲ地質鑛屬ノ調査ニ用ヒ石
狩以南ハ既ニ成功セリ

石狩後志膽振渡鷗四國米人ライマン氏ヲミテ

調査セシムル所ノ諸鑛屬其最モ著シキ者凡ニ

列スル所ノ如シ就中札幌郡本ロムイノ煤田ハ

今其水準上ニ就テ測ル所ノ量一千万噸ニ下ラ

ス故ニ開採ノ日ニ當ツテハ得ル所必ス之ニ倍

スルアラント云フ

石炭

岩内

概測一百五十万噸

民部

但テキラルデレー子ノ最モ由サ
キ水準上ニ在ル者ヲ等ス下之ニ同シ

ホロムイ

概測一千万噸

沙鉄

勇羅夫

概測十二万噸

古武井

概測五千〇十五噸

硫黄

登別

概測一百噸

硫黄登

概測七十五噸

古武井

概測二百廿五噸

石灰

聳呂澤

概測二千万噸

石寄村

概測二百廿五万五千噸

上湯澤

概測二千噸

聳木

概測四千三百噸

金

登志別

久遠

江刺

石腦油

概測價二百五十万弗

聳木

山越内

泉澤

第十

第八

全道地理測量ノ事ワツソン氏ニ委託シ既ニ基線ヲ勇拂郡ニ立テ之ヲ四方ニ推測ス其成功ノ日ニ至テハ全道ノ地圖ヲ製シ山川ノ形勢原野ノ廣狹ヲ審ニシ之ヲ衆庶ニ廣布シ以テ移住ノ者ニ便ニシ益招徠ノ道ヲ開ントス

比年札幌近傍数里間ノ地ニ於テ伐採スル所ノ木材数十万石ニ下ラス之ヲ本廳諸營繕ノ用ニ供ス現時貯藏スル所猶六万石餘ニ及ヘリ蓋シ

第九

石狩豊平千歳雨竜空知當別諸川上流木材ノ夥多ナル伐採数年ヲ経ルモ亦應ニ盡ルナカルヘシ今札幌ニ木挽器械アリ一ハ蒸氣ヲ以テシハ水カヲ用ユ其鋸断スル所ノ材ハ之ヲ小樽港ニ出ス又蒸氣器械ヲ室蘭港ニ設ケ後志有珠諸山ノ巨材ヲ漕運シテ此地ニ致シ益木材ノ利ヲ大ニシ之ヲ海外ニ輸出セントス

第十

木挽器械ノ水カヲ用ル者ハ附スルニ粉磨ヲ以テス嘗テ札幌近傍移民收穫スル所ノ小麥ヲ粉末シ之ヲ用テ蒸餅ヲ作ルニ其精製外國輸入ノ

第五

口品ニ減セス

明治五年ヨリ同七年マテ外國貿易ヲ除ク外海關
輸出入品ノ収税ヲ免シ以テ人民糶糶ノ利ヲ次頁ノ物産
興隆ノ道ヲ立ツ蓋シ海關六口免スル所ノ税凡ソ五十六万
圓ニ下ラス

第六

窮民賑恤ノ法アリ鰥寡孤獨老幼廢疾ヲ救助シ育
濟館ヲ函館ニ設ケ棄児ヲ養之月ニ又常平倉ヲ
設ケ米二万五千石塩一万俵ヲ各處ニ分置シ救
荒ノ用ニ供ス又貸付所ヲ建テ子息ヲ養フシテ
官金ヲ出貸シ産業ノ次頁本トス

歲八朱
ノ割

第七

保任會社ヲ創立シ難破漂損請負及ヒ荷為換等
ノ方法ヲ立テ海路ノ危險ヲ保シ貨物運輸ノ便
ヲ開ケリ又商人ヲシテ全道ノ産物ヲ海外ニ輸
出セシメ貿易ヲ盛ニシ以テ大ニ利源ヲ開ク
ヲ謀ル清國上海ハ既ニ開通驛ノ設アリ

第八

全道教育ノ法未タ具倫スルニ至ラズト金氏東京
ニ男女學校ノ設アリ人材ヲ養育シ專ラ本使ノ
用ニ供スル所以ノ者ニシテ其成業ヲ俟テ之ヲ
北地ニ移サントス其他官費ヲ以テ設立スル者ハ
札幌函館ニ六費アリ 又有珠余市等ノ諸費モ

第五

多クハ官費ニ属ス

從來牧畜種植ノ法其要ヲ得サル者多シ故ニ官園ヲ東京ニ設ケ内地及ヒ海外動植ノ良種ヲ収集シ輸送ノ時間久ヲ經ル者皆此地ニ於テ安息生養セシメ然後之ヲ札幌函館ノ兩官園ニ轉移シ且ツ每園現衛生徒ヲ置キ養植ノ方法ヲ講求シ漸次之ヲ全道ニ擴充セントス

第四

第六

人民ノ保護一日モ缺ク可カラサルヲ以テ先ツ殖民六千人ヲ募リ屯田ノ制ニ倣ヒ各處ニ移住シ兵伍ヲ編制シ及ビ海軍省ヨリ兵艦二隻ヲシ

第七

テ北海ヲ警備セシムルノ議既ニ允裁ヲ經タリ今將ニ施行セントス
全道ノ稅則ハ各處營業ノ難易ト輸出ノ便否トニ仍リ差等アリハ分ヨリ起リ其重キ者二割ニ過キス大抵旧貫ニ仍リ之ヲ施行ス然レトモ根室支廳管下諸郡ノ如キハ旧來三割ノ稅アリシモ庚午以來八分ニ改正シ幌泉樣似浦川三石等ノ諸郡ハ三割ノ稅ヲ二割ニ減セリ獨リ石狩ノ鮭魚ニ二割四分ノ稅ヲ課スル者ハ其營業ノ際官ノ補助ヲ仰キ利ヲ得ルノ多キヲ以テナリ樺

第五

第六

太洲ニ至テハ地租雜稅一切置テ課セス全道ノ人民漁獵ヲ以テ本業トス故ニ其課稅之ヲ正租ニ充ツ本文等ノ所ノ者即チ是ナリ他ノ地方雜稅ノ例ヲ以テ論スルカレ

本使購入スル所ノ船艦蒸氣帆前大小十艘アリ或ハ函館室蘭石狩楠溪ノ諸港航海ノ用ニ充テ或ハ東京大坂長崎等ニ廻漕シ航海大ニ開ケ往來絶ヘス是ヲ以テ輸入スル所ノ物品ハ大ニ往來ニ倍シ其價隨テ低下シ輸出品ハ益穀價増スニ至レリ

第六

電信局ヲ札幌ニ建テ架線室蘭函館ニ港ヲ經福山ニ達シ其一ハ小樽港ニ到ル落成已ニ近キニ

第七

第七

アリ郵便ノ如キハ石狩以南既ニ施行セリ函館北方ノ人民前年兵燹ニ罹リ瘡痍未タ復セサルヲ恤ミ至申ノ春毎戸平均金四十六圓六十二錢毎口米八斗ヲ頒與シ福山江刺モ亦屢金穀ヲ賜貸シテ其疲弊ヲ振救セリ

移住ノ人民各其業ニ安ニシ生計ノ餘ヲ以テ力ヲ協セ官費ヲ助クル者少カラス乃チ福山灣ノ碼頭ヲ設ケ填淤ヲ浚シ精進豊平兩川ノ間ニ新川ヲ疏鑿シ篠路村ニ新道ヲ造リ熊白海岸ノ往來ヲ通シフレコヘ山ノ嶮路ヲ刻削スル等是ナ

全道ノ戸口年々逐テ繁殖スル左ノ如キ

明治三年調

戸數 二万九千零九十四

人口 十三万六千二百七十八

内 男七万二千零四十人
女六万四千二百三十八人

明治五年調

戸數 三万五千八百二十八

人口 十七万五千三百八十七

内 男九万七千二百七十七人
女七万八千一百一十人

増額 戸數 六千七百三十四
人口 三万九千二百零九

即千函館一所ニ就テ之ヲ算スルニ

明治三年調

戸數 四千二百十八

人口 一万六千四百七十五

内 男七千八百九十五人
女八千五百八十人

明治五年調

戸數 六千四百二十八

人口 二万五千四百零三

内男 一万三千二百二十八人
女 一万二千三百七十五人

増額

戸數 二千二百十

人口 八千九百二十八

人煙繁殖前文舉クル所ノ如シ今又全道ノ馬匹
船數ヲ掲ケ以テ之ヲ證ス

明治三年調

馬匹 一万七千六百十一

船數 一万四千三百七十六

明治五年調

馬匹 二万千百五十七

船數 二万三千四百五十二

増額

馬匹 三千五百四十六

船數 九千零七十六

全道漁獵昆布ノ收穫亦隨テ増加ス其數左ノ如

シ

明治三年調

產物高 四十六万千五百九十八石零一升二合餘

明治四年調

同 五十四万千六百八十四石五斗四升餘

明治五年調

同 六十万零七千二百三十一石五斗四升七合餘

増額十四万五千六百二十三石五斗三升五合餘

膽振以北ノ如キ從來荒漠榛莽ノ地タリ明治三年以來始テ開拓ニ從事ス漸次墾闢現時種植ノ利少シトセズ今姑ラク兩三町ヲ挙ケ参考ニ備フ

明治三年調

札幌郡 開墾地 百六十五町七及餘

此出穀三千三百十四石餘

有珠郡 同 上 三百十七町一及一畝

此出穀六千四百四十二石二斗五升餘

余市郡 同 上 二十一町六及三畝三步

此出穀四百五十四石二斗九升三合

明治五年調

札幌郡 開墾地 三百三十八町六及餘

此出穀六千七百十二石餘

有珠郡 同 上 六百七十八町零一畝五步

此出穀一万二千九百六十石二斗餘

余市郡 同 上 百九十一町八及七畝二十一步

此出穀三千八百三十七石五斗二升五合

良
推
仁

任

二從事不漸次墾闢現時種植ノ

テ姑
ウク
兩三
所ヲ
挙ケ
参考
ニ備

平調

五町七反餘

穀三千三百十四石餘

七町一反一畝

穀六千四百四十二石二斗五升餘

町六及三畝三步

穀四百五十四石二斗九升三合

平調

一十八町六反餘

穀六千七百十二石餘

七十八町零一畝五步

出穀一万二千九百六十石二升

一町八反七畝二十一歩

出穀三千八百三十七石五斗

開馬楚

九、

日新真事誌第二周年第二百七十一號鈔錄

三月一日横濱新聞「ジアパニガゼット」ニ曰ク開
拓使ニ對シ四十ヶ條ノ疑問「ジヤパンガゼット」
ニ投シ其編輯者ニ記載ヲ乞フ
二月十三日日新真事誌ニ載スル所ノ文ハ「ジヤ
パンガゼット」ニ記セシ者ヲ辨駁スル者ニシテ
其說ク所口明漸ナリト雖モ亦答辨ナクニハア
ル可ラス然ラスニハ亦他ノ開拓使ノ事實ヲ知
ラサル人ヲシテ誤ラシメン
辨駁者ノ言ハ以為ラク四十ヶ條ノ難問ハ無稽